奇蹟

中上健次

朝日新聞社

奇蹟

定価一、五五〇円

平成元年四月十日　第一刷発行

著　者　中上健次
発行者　八尋舜右
印刷所　精興社
製本所　清美堂製本
発行所　朝日新聞社
〒104―11　東京都中央区築地五ノ三ノ二
☎〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替・東京〇―一七三〇

©Kenji Nakagami 1989 Printed in Japan

ISBN4-02-255994-2

奇蹟・目次

タイチの誕生　5
蓮華のうてな　52
七つの大罪／等活地獄　92
疾風怒濤　138
イクオ外伝　178
朋輩のぬくもり　254
満開の夏芙蓉　291
タイチの終焉　346

装幀・菊地信義

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

奇

蹟

初出誌　「朝日ジャーナル」昭和六十二年一月二・九日合併号から昭和六十三年十二月十六日号まで連載

タイチの誕生

どこから見ても巨大な魚の上顎の部分に見えた。その湾に向かって広がったチガヤやハマボウフウの草叢の中を背を丸めて歩いていくと、いつも妙な悲しみに襲われる。トモノオジはその妙な悲しみが、巨大な魚の巨大な上顎に打ち当たる海の潮音に由来するのだと信じ、両手で耳をふたぐのだった。指に擦り傷や斬り傷がついているせいか、齢を取って自然にまがり節くれだったためか、それとも端から両の手で両の耳を完全にふたぐのをあきらめてそうなったのか、指と指の隙間から漏れ聴こえる潮音はいっそう響き籠り、トモノオジの妙な悲しみはいや増しに増す。

トモノオジは体に広がる悲しみを、幻覚の種のようなものだと思っていた。日が魚の上顎の先にある岩に当たり水晶のように光らせる頃から、湾面が葡萄の汁をたらしたように染まる夕暮れまで、ほとんど日がな一日、震えながら幻覚の中にいた。幻覚があらわれ、ある時ふと正気にもどり、また幻覚に身も心も吸い込まれてゆく。正気に戻った時、自分は酒を飲み続けて中毒になったと思い、きっぱりと酒を断って、昔、甲種合格した時のように健康あふれる体で精神病院を出て路地に戻ると決心して胸を張るが、潮音を耳にし、魚の上顎の部分に打ち当たる海の白い波を見ていると、次第に巨大

な魚が酒を欲しくて顎をいっぱいにひいていると思え、街中の酒を飲むだけ飲んだはずなのに、酒を口に入れようとした時に酒の席から引き出されてしまったくやしさが心に満ち、今、精神病院の裏の草の茂みに立っている自分は蟬の抜け殻のようなもので、横たわり海の波を一口でも飲もうとしている巨大な魚こそ自分の姿だと思え、口元まで来ては泡でしめらせ匂いをかがせるだけで逃げる波に腹の底から怒りがこみあがり、声をかぎりにどなるのだった。

「飲ましたれ。ワレ。クソ」トモノオジはどなり続けた。

「なんな。ワレ。何がエラいんな。金、そんなに欲しんか？　金じゃったら腐るほどあるど。飲ますの、おしむんか？」

トモノオジは怒りに震えながら、素速くしゃがんで石をつかみ、石でその人を嬲るような精神を打ちくだいてやると身構える。一瞬の隙でも見せたら躍りかかって石で打ちくだいてやる。トモノオジはまばたき一つせず、瞬時に跳躍出来るように四肢を緊張させたまま立っていた。怒りに震えている体に潮音がしのび寄り、耳から入って体に響く。その潮音に気づく度に、トモノオジは怒りと同じくらい悲しみが体に満ちているのを知り、巨大な魚と同じようにゆっくりと体を倒し、草の茂みに横たわる。精神病院の職員に見とがめられなかったら、湾一面が真紅に変わる頃まで、そのままの姿でトモノオジはいるのだった。巨大な魚は路地の何人もの者がそうだったように、体中の血を吐き出し呻いているのだった。

トモノオジのいる三輪崎の精神病院にタイチの訃報が届いた時、トモノオジは丁度日課のようになった巨大な魚の幻覚に取りつかれ、巨大な魚そのものとなって草の茂みの中に横たわり、世界の七つ

の海を泳ぎ廻った昔の楽しい事や苦労話をとりとめもなく思い出し、自分自身に向かって話している最中だった。

トモノオジの脇に立った路地の若衆は、息急き切って知らせようと急いだ自分の心の昂ぶりをはぐらかされたように、精神病院の草の茂みに横たわったトモノオジを見て声を呑み、それでも気をふるい立たせて「オジ」と声を掛ける。巨大な魚となったトモノオジは動かない。若衆はかがんでトモノオジの顔をのぞき込む。トモノオジは独り言をつぶやいている。若衆は「オジ、オジ」と揺さぶった。トモノオジは揺さぶられたはずみに声に出して独り言をつぶやいた。若衆はトモノオジの独り言に耳を傾け言葉を聴き取ろうとし、案の定、懸念していたように脈絡のつかない意味不明の言葉なのに気づき、路地で昔はならした荒くれのトモノオジであってもアル中になり、あまつさえ齢を食ってしまっては仕方がない、と帰りかかった。

トモノオジにふっと正気が訪れたのは、若衆が精神病院の裏のフェンスを抜けた時だった。トモノオジは起きあがり、若衆に声を掛けた。若衆はフェンスの外に立って振り返った。

「タイチノアニが殺されとったんじゃ」

若衆は、何を伝えてもアル中で精神病院に強制入院させられているトモノオジに伝わらない、とあきらめきったようにつぶやく。トモノオジは一瞬、巨大な魚が吐き出す真紅の潮を想い浮かべ、その魚と自分が急に二つに引き離されるような気になりながら、「タイチが殺されたんじゃて」と声を出す。

「おうよ。タイチノアニがやっぱり殺されとったんじゃ。皆な言っとったようにグルグルに簀巻きにされて山奥のダムに放り込まれとったんじゃ」

「死んだじゃて？」
「死んどる」
若衆はフェンス越しに言う。若衆は幻覚からさめたのか、それとも新たに見る幻覚の一つなのか定かでないトモノオジを哀れむような眼で見る。トモノオジは草の葉を手で払う。ついでに巨大な魚となって潮を飲もうと顎を開いていたので筋肉が痛むと顎を動かすと、若衆はトモノオジなど相手にしきれないというように「しっかりせなあかんど」と大人びてつぶやく。
「タイチが殺されたんじゃと」トモノオジは言う。
若衆が「おうよ」と相槌を打つのを耳にし、トモノオジはまた巨大な魚に戻ってしまったようにくるりと背を向けて湾の方に向かって立つ。自分が毎日横たわり、怒りに震え苦しみに呻いたのはタイチの身に起こったこの事だったのか。
トモノオジは震える。
「死んだかよ」トモノオジはつぶやく。
「若い時分、喧嘩して相手の眼を潰してしもたけど、おまえが本物の眼、潰されたんかよ」
トモノオジは湾を見ながらゆっくりと身を屈め、口元まで来て匂いをかがせるだけで逃げる波にせいた巨大な魚のように口をあけて横たわる。トモノオジはすぐ巨大な魚になる。巨大な魚は大声でしゃべった。普段と違い大声で話し続けていないと声の隙間から幻覚の種の潮音が入り込み、一層自分が悲しみのまっただ中にひき込まれる気がする。
トモノオジが収容された三輪崎の精神病院に、路地で唯一の産婆だったオリュウノオバが現れるよ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

うになったのは、タイチの訃報が届いてからほどなくの事だった。
その日は不思議な事つづきだった。病棟で錯乱した同室の男がアルミの食器で窓枠を叩き続けるのを見ていて、トモノオジは窓の外にオリュウノオバが立ち自分に手招きしているのに気づいた。幻覚のさめたトモノオジは、はるか昔にオリュウノオバは死んだはずだ、それに律儀者で信心深いオリュウノオバが、馬喰、博奕打ち、極道、そのあげくがアル中の自分のような半端者に、柔らかい路地の女のように笑みをつくり手招きするはずがないと思うが、立って窓に寄った。オリュウノオバはトモノオジに「元気かよ？」と声を掛け、トモノオジがとまどっていると、「来てみいま」といつものように三輪崎の湾の全貌が見える精神病院の裏に来いと言う。トモノオジはそれも幻覚なのだろうと思い、同室の男に外に老婆が立っているのが見えるかと問いただそうとするが、男はアルミの食器で窓枠を叩くのに忙しくて取りあわない。
「トモよい」オリュウノオバは急いたように名を呼んだ。
「吾背はオバの言う事を聴かんのか？　吾背を一から十まで覚えとるの、このオバじゃぞ」
トモノオジは混乱する。トモノオジは眼をつむり、頭を振り、それからはっきりと自分は今、幻覚の中にいるのだと気づいたように、「一から十まで何を知ろに」と鼻で吹く。
「オバは死んだんじゃがい。このトモは生きとる。イバラの留やヒデの事なら、あれらもう死んどるさか一から十まで知っとろが、何で死んだ者にまだ生きとる者の十まで分かる？」
言い込めてやったと得意顔のトモノオジをオリュウノオバは哀れむような眼で見る。黙ったまま、湾が見える外に出ろ、と手招きする。窓の外に立ったオリュウノオバを見ていて、トモノオジは悪い事をした、と思った。路地にいて元気な時も寝込んでからも、オリュウノオバには誰もが一目置いて

いた。いつの時代でも後から後から尽きる事なく湧いて出てくるワルも悪戯者も、オリュウノオバと礼如さんには本心から悪さをした事がなかった。

トモノオジはオリュウノオバをやり込めた事を謝るような気持ちで外に出る。すぐ幻覚の種のような潮音が耳に籠る。オリュウノオバはトモノオジの姿を見るなり、「トモ。オバは先に行て、お釈迦様にも阿弥陀様にも、お前らの事、頼んだたんじぇ」と言う。オリュウノオバはトモノオジに脇に来て坐れと言う。トモノオジはチガヤの枯れ草の上に尻をおろした。

「蓮の花、やっぱし咲いとった。どっさりなつかし顔おった。皆なが、オバ、いま来たんこ？　遅かったねェ、と集まって来るさか、お釈迦様がオバを呼んで、『お前なんな？』と言う。オバの事じゃさか、『なんな、と言うのは、何な？』と口答えしたった。お釈迦様ともあろう人がオバの事を知らんのか？　脇で毛坊主の礼如さんが、オリュウ、口がすぎると止めるけど、オバは一遍はお釈迦様に文句言おと思て腹くくって行たんやさか、と思て、『路地に生まれてくる子、分けへだてなしに取りあげ続けたし、路地に死んだ者の祥月命日を一字も間違わんと諳じて、毛坊主の礼如さんにつかえたオリュウじゃわ』と言うた」オリュウノオバは得意げに言う。

トモノオジは潮音が耳の内側で次第に強く籠りオリュウノオバの言葉をかき消すような勢いになっているのに気づいた。オリュウノオバの声が聴こえるうちに、そして、また自分が巨大な魚になってしまわないうちに、耳に入れたばかりのタイチの訃報を伝えておこうと、「あのタイチを知っとるかい？」と問いかけた。オリュウノオバは不意をつかれたように黙る。

「タイチを覚えとるかい」トモノオジは訊き直した。

「トモ」オリュウノオバは言う。「オバ、誰の事でも一から十まで知っとる」

「俺の事もか」
「もう萎びて酒飲んでグレとるけど、トモもオバが取り上げたんじゃのに」オリュウノオバはそう言って深い溜息をつく。オリュウノオバの溜息が潮音そのもののように響く。トモノオジはその潮音に促されるように巨大な魚に変わってゆく自分に気づくのだった。

オリュウノオバは、巨大な魚に変わってゆくトモノオジの心の中の悲しみを労るのはただ静かにそのままにしてやる事しかないというように立ちあがる。オリュウノオバは巨大な魚の上顎だとトモノオジに見える三輪崎の湾を見る。光が空から降りそそぎ、湾の崖に生えた馬目樫や椎の葉が一面にかすんだように光で輪郭がぼけている。誰の眼にもその風景は同じように映るはずだった。オリュウノオバは見つめた。路地で生まれる生命を数かぎりなく眼にして来たオリュウノオバは、生命が光と共に束になって海辺の樹林にふりそそぎ、地面に落ち、海に吸い込まれてゆくと思う。その生命のほんの一粒が、今、路地の誰もが衝撃を受け酷さに震えるほどの死に方をしたタイチなのだと思い、オリュウノオバは声もない。

トモノオジはタイチの一から十までを知っていると思った。というのもタイチの親の菊之助はトモノオジの遊び仲間だった。オリュウノオバの知っている一が、目鼻が整い、手足が整って月満ちて女親の腹から出て来たのを言うのなら、トモノオジはタイチがタイチになる前、まだ菊之助の股の汁の頃からタイチを知っていた。菊之助は、旅役者に入れ上げた女親が名づけた通り博奕や喧嘩にはからきし押しが効かないのに、女には滅法手が早かった。タイチが腹に入った頃、菊之助はトモノオジの家に青ざめて駆け込んで来たことがあった。

「幽霊が出たんじゃ」菊之助は上ずった声で言った。丁度、トモノオジの家に、後々それぞれ地廻りの組長になって対立するヒガシのキーやんとカドタのマサルの二人がトモノオジの若衆としてごろごろしていた。二人は怖い物なしの頃だから「どれ、捕まえたる」「見世物に売り飛ばしたる」と飛び出す。菊之助は二人が飛び出してから急に思い当たったように、「トモキ、あれ、幽霊と違うかもしれん」と言い出す。トモノオジはまた色恋沙汰の話かと笑いながら、「幽霊じゃと女に脅かされて飛び込んで来たんかよ?」とからかうと、菊之助は「まァ、ええんじゃ」と急に話を打ち切り、久し振りにやった博奕で勝ちに勝ったが、盆の仲間にイバラの留が入っていたので金を取る事も出来ないとグチリ始めた。

「イバラの留が負けを払わんかい?」トモノオジは訊いた。「おかしいの、あのイバラがかい」

「そうじゃ」トモノオジは菊之助の顔をみつめた。

菊之助はトモノオジの視線をそらすようにうつむいた。「そりゃ、なんど、理由があるんじゃろ」トモノオジがそう言うと、菊之助は待っていたように、実のところ、イバラの留の女に手を出し、それをイバラの留に勘づかれてしまったようだと言い、トモノオジと朋輩の仲でもある事だから、穏便に取りなしてくれないかと言う。

「イバラの留、女の一人や二人に不自由せんじゃから、路地のおまえを半殺しにもせんじゃろが」トモノオジがつぶやくと、菊之助は半殺しという言葉にひっかかったように「女、子供孕んだんじゃ、性根入れ替えるさか、どうか見逃してくれと頼んでくれ」と言う。子供の頃からの遊び仲間で徴兵検査も一緒に受けた仲だから、気の荒い朋輩には自分が口ぞえしてやるしかないと思っているところへ、外へ飛び出していったヒガシのキーやんとカドタのマサルが駆け込んで来る。カドタのマサルはトモ

ノオジの家のたたきに立って家の中にいる菊之助を見つけるなり、履いている物を脱ぐのももどかしげに上がり、菊之助を蹴り上げ倒れたところを持っている下駄で額面を打った。咄嗟の事だったので仕方なくトモノオジは菊之助に馬のりになって殴りつづけるカドタのマサルを止める為、後ろから背中を足で蹴り上げた。

「アニ。こいつは女、放ったらかしにして来たんじゃ」カドタのマサルはどなり、また血だらけの菊之助の顔に下駄を振りおろそうとする。

「止めよと言うんじゃ」トモノオジはカドタのマサルの顔を拳で殴った。カドタのマサルは下駄を握ったまま倒れる。

「アニ。女、そこの山の登り口で首縊って死んどる。こいつは見とったんじゃ」

血だらけの菊之助はあおむけに倒れ、動かなかった。

菊之助はトモノオジが訊いても、路地の区長が訊いても、その夜は何も言わなかったが、形ばかりの祝言を挙げタイチが生まれてしばらく経って、その女とも所帯を持つ約束をしていたと打ちあけた。

オリュウノオバははっきり覚えている。普段どの路地の女でも、子を産む時はわざわざ裏山の中腹にあったオリュウノオバの家に来はしなかったのに、菊之助は足元の危なっかしい女を連れて石段を登って、やって来たのだった。オリュウノオバは思うに、それには特別の意味があった。菊之助ははっきり知っていた。自分の周りに女の人垣が出来、何一つ他の男より優れて出来たためしがないのに女が腰から落ちるのは、歌舞音曲に淫蕩をかきたてられる中本の血を持っているからだった。人は誰も菊之助を中本の一統につらなる者なぞとは思っていなかった。しかし、旅役者に入れ上げ、家を出たり入ったりしていた女親から菊之助がまぎれもなく路地に流れる中本の血の若衆だと教えられてい

た。菊之助はオリュウノオバの家の竈の前に坐り、湯をわかしながら、路地に伝わるように、そして、オリュウノオバが路地のただ一人の産婆として現実に見て来たように、これから女の腹を蹴って出てくる子がどんな姿をしていても覚悟していると言った。オリュウノオバが女の腹をさするのにかまけて聞き流していると「オバ、首縊った女、覚えとるこ？」と菊之助にしては無頼な口調で訊く。

「あれも孕んどったんじゃ。あの時、一緒になって、生まれてくる子と三人で暮らしてくれ、と言われた。オレは見とったんじゃ。何にも言わんと」菊之助はそう言って「オバ」と改めて呼ぶ。

「なんなら。うるさい」オリュウノオバはわざと迷惑げに答え、女の張りつめた腹をさすりながら振り返る。竈の火に照らされて菊之助の額から鼻にかけて裂けた傷跡がくっきり浮かび上がる。傷跡は酷い殴られようをしたと一目で分かるものだったが、傷跡のある顔は醜くはなかった。

「オバ、もううっすらとしか見えんようになって来たんじゃ」

「何がよ？」オリュウノオバは動悸を気づかれないように突っけんどに訊く。

「左眼、カドタのマサルに殴られた時から見えなんだが、右の方もうっすらとしか見えんようになって来た」

オリュウノオバは答えに詰まり黙っていると、菊之助は竈の火をいじくり出す。

「お母が役者の芝居、思い出すたんびに、俺に奇麗な眼しとる、役者にも滅多におらん、と言うたんじゃけどねェ。見えなんだらどうしようもない」

どうしようもないのならどうするのだ、とオリュウノオバはその時、不吉な予感にとらわれ、心の中で合の手を入れ、菊之助の気の弱りをなじりたかったが、ほどなく破水がはじまったので取りまぎ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo